美術学部

近現代美術史・大学史研究センター
Geidai Archives Center of Modern Art

年報・紀要

令和5年度（2023）

目次

年報……3
Ⅰ組織概要……3
1. 理念……3
2. 業務内容……3
3. 沿革……3
4. 組織・スタッフ……4
5. 運営委員会……4
6. 施設・設備……4
Ⅱ令和5年度（2023）の活動状況……5
1. 組織・運営……5
2. 資料の管理・公開……5
3. 社会教育事業……7
4. 普及活動……8
5. 調査・研究活動……9
6. 業務日誌（2023年4月1日～2024年3月31日）……11
紀要……12
［資料紹介］文部省工芸技術講習所の日誌　浅井ふたば……12

年報

Ⅰ組織概要

1. 理念

東京藝術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センターは、1887年（明治20）に設立した東京美術学校から現在の東京藝術大学美術学部に関係した記録文書、教職員・卒業生および関係者から寄贈された大学史関連資料を保管しています。これらは本学の歴史にとって貴重であるばかりか、日本の近現代美術史を研究するための重要な基礎資料でもあります。私たちは受け継がれた資料を維持管理することはもちろん、これらを活用した研究の活動拠点（センター）としての役割を果たしていきたいと考えています。

2. 業務内容

- 資料の収集、整理及び保存に関すること
  資料の移管・受入、所蔵資料の整理、所蔵資料の保存環境の整備など
- 資料の利用に関すること
  資料閲覧、レファレンスなど
- 資料の調査及び研究に関すること
  展示、所蔵資料に関する調査、研究会・紀要への論文執筆による成果発表など
- 普及活動に関すること
  ウェブページでの情報公開、公開講座の開催、東京藝術大学美術学部の歴史コンテンツ制作など

3. 沿革

1964（昭和39）年6月	美術学部紀要編集のため教育資料編纂室設置 沿革史編集委員選出
1981（昭和56）年10月	東京芸術大学百年史編集部会要項制定
1987（昭和62）年10月	『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第1巻』刊行
1992（平成4）年10月	『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第2巻』刊行
1997（平成9）年3月	『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第3巻』及び『上野直昭日記』　(『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第3巻別巻』)刊行
2003（平成15）年3月	『東京芸術大学百年史　大学篇』刊行
2003（平成15）年11月	『東京芸術大学百年史　美術学部篇』刊行
2018（平成30）年7月	現在の正木記念館に移動
2020（令和2）年1月	美術学部近現代美術史・大学史研究センター設置
2022（令和4）年4月	歴史資料等保有施設に指定

4.所蔵資料

公文書等の管理に関する法律に基づき、特別な管理を行なっている歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料を収集・保存し公開している。

区分	資料概要	数量
大学史史料	東京美術学校及び東京藝術大学美術学部の事務文書	1,415点
寄贈資料	東京藝術大学美術学部に関係する個人や団体から寄贈された資料	8資料群 8,554点

※ウェブページで公開されているもの。

4.組織・スタッフ

センター長

大学美術館教授　古田亮

教員等

学術インストラクター　浅井ふたば

学術インストラクター　芹生春菜

協力研究員

AMC准教授　嘉村哲郎

5.運営委員会

「東京藝術大学美術学部近現代美術史・大学史センター内規」にもとづき、センターの運営に係る事項の審議をおこなう委員会。

2023年度運営委員名簿

委員

大学院美術研究科文化財保存学教授　荒井経

大学美術館館長・教授　黒川廣子

絵画科日本画教授　斎藤典彦

芸術学科芸術学教授　佐藤道信

工芸科鍛金教授　丸山智巳

大学院美術研究科グローバルアートプラクティス准教授　李美那

オブザーバー

美術学部長・大学院美術研究科長・建築科教授　光井渉

6.施設・設備

施設総面積

年度	合計	執務	展示	閲覧	書庫
2020年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2021年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡

2022年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2023年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡

専用書庫の機能：空調機有、温湿度計有、除湿器有、施錠有、施設出入口に消火器有、書庫耐震固定工事済。

Ⅱ令和5年度（2023）の活動状況

1. 組織・運営

1-1. 美術学部近現代美術史・大学史研究センター運営委員会の開催

下記のとおり、運営委員会を開催した。

日時　：2023年7月24日
場所　：オンライン
出席者：古田亮、光井渉、黒川廣子、斉藤典彦、佐藤道信、丸山智巳、金井島伸志（美術学部事務長）
欠席者：荒井経、李美那
議題　：報告事項
1. 令和4年度の事業報告
2. 令和5年度前期の事業報告

2. 資料の管理・公開

2-1. 資料の受入・整理

①資料の移管・受入

移管

移管元	主な内容	点数
芸術学科西洋美術史研究室	写真	2点

受入

寄贈者	主な内容	点数
橋本かおる	橋本義夫関連資料（写真アルバム）	2点
山田敬伸	山田敬中関連資料（印章等）	67点
吉野みちる	吉野康彦関連資料（写真等）	11点
第一書房	『国華』第1～1388号	1,388点

②目録の整備・公表

目録のオンライン公開
・機関アーカイブズ［大学史史料］

・収集アーカイブズ［久保田鼎関係資料／上野直昭関係資料／六角紫水関係資料／ 大村西崖関係資料／斉藤佳三関係資料／三好二郎関係資料／前野まさる関係資料 ／中村勝馬関係資料］

③資料のデジタル化

・IA001-003-097　授業関係書類　自明治44年1月至大正5年12月　教務掛
・IA001-003-098　授業関係書類　自大正6年1月至大正11年12月　教務掛
・IA001-003-099　授業関係書類　自大正12年1月　教務掛
・IA001-003-101　授業関係書類　自昭和16年7月　教務掛

2-2. 資料の利用

①資料利用状況

	閲覧室利用者数	問合せ数	資料閲覧者数	画像提供数	掲載放映許可数
4月	15	5	2	0	1
5月	31	5	0	0	1
6月	35	3	2	2	4
7月	29	4	3	0	0
8月	―	2	―	0	2
9月	―	3	―	0	1
10月	21	3	3	0	1
11月	32	3	0	0	0
12月	33	1	1	0	0
1月	38	4	2	1	0
2月	―	0	―	0	0
3月	―	2	―	0	0

②資料活用実績

・依田徹「茶会記に見る今泉雄作の交友関係―「記事珠」の記述を中心に―」『五浦論叢』第29号、茨城大学五浦美術文化研究所、2022年12月
・柳毅『坂東に洋画の光を　大久保喜一の伝記物語―ガラスの大久保と称された画家―』会議録センター、2023年5月
・鈴木恒志「明治末から大正期を生きた日本画家・林皓幹の生涯と学習」『岡山県立美術館紀要』第13号、岡山県立美術館、2022年7月
・柳田さやか『「書」の近代―その在りかをめぐる理論と制度』森話社、2023年10月
・常見美紀子「服飾家石山彰の東京芸術大学工芸科図案部におけるファッション・デザイン教育（1951年4月～1954年3月）―石山ノート「Education of Design」を基に―」『日本デザイン学会誌　デザイン学研究特集号』第30巻1号、日本デザイン学会、2023年8月
・下田章平『清末民初書画碑帖収蔵研究』知泉書館、2023年12月

・福田栞「日本統治期の台湾在住日本人画家郷原古統の形成―東京美術学校入学から《南薫綽約》（1927年）まで」『近代画説』第32号、明治美術学会、2023年12月
・鈴木恒志「明治末から大正期を生きた日本画家・林皓幹の生涯と学習」『岡山県立美術館紀要』第13号、岡山県立美術館、2022年7月

3. 社会教育事業

3-1. 展示の開催

① 「卒業制作と買上の歴史―東京美術学校から東京藝術大学へ―」 2023年4月7日～5月7日、田中記念室前室（担当：芹生）

東京藝術大学の前身である東京美術学校は明治22年(1987)に開校し、同26年に最初の卒業生を送り出す。その当時から収蔵が続けられてきた卒業制作の膨大な作品群は、現在大学美術館に所蔵され、本学の重要なコレクションとなっている。卒業制作は開校間もなく教育課程に定められ、制作にかかる費用は学校から支給された。学校に納められた作品は、教育成果を内外にアピールする成績品としてしばしば展覧会で展示され、展示はやがて卒業式と結びついた催事となっていく。

『買上展』藝大コレクション展（2023年3月31日-5月7日、大学美術館)に合わせ、当センター所蔵の卒業制作と作品買上に関する資料を紹介した。

展示資料
・「東京美術学校年報一　従明治廿二年至仝廿九年」
・「自明治四十四年至大正三年 儀式関係書類 庶務掛」所収「卒業生姓名及卒業製作目録」「成績品陳列展覧ニ関スル規定」「式場陳列場及順路略図」
・「昭和七年度卒業製作費調」

② 「藝大と光熱費―東京美術学校時代の会計資料―」2023年7月7日～7月29日、田中記念室前室（担当：浅井）

近年、電気料金の値上がりが大学運営に影響を及ぼしている。本展示では、東京美術学校時代の光熱費支払いに関する記録を紹介した。会計掛が作成した資料を通じて、当時の光熱費負担の実態を知ることができる貴重な機会となった。

展示資料
・「明治44年12月以降　電燈電話水道瓦斯関係書類　会計掛」
・「昭和16年度　瓦斯電気水道請求書綴　会計掛」
・「昭和17年度　瓦斯電気水道請求書綴　会計掛」

③ 「藝大と災害―関東大震災の記録―」2023年10月27日～12月15日、田中記念室前室（担当：浅井）

1923年9月1日に発生した関東大震災から100年が経過した。本展示では、関東大震災発生当時の東京美術学校の状況を伝える公式記録や、震災直後の社会情勢を報じた新聞を紹介した。美術学校は夏休み中で大きな被害を免れたものの、上野公園が避難場所であったことから、多くの避難者を受け入れ、避難所および物資配給所として2か月間休業した記録が残されている。また、展示資料の一つとして、「マエダシキカタカナ」という独特なフォントで表記された新聞を公開した。来館者は、この特徴的な文字の読み解きを通じて、当時の新聞文化やにも触れることができた。

展示資料
・「職員災害調」（「大正12年震災関係書類」収録）
・「コクジシンブン（大正12年9月15日第2号）」（「大正12年震災関係書類」収録）
・「東京美術学校震災救護施設状況調」（「自大正11年至大正12年　文部省往復書類　庶務掛」収録）

3-2. 他機関開催の展示会への出陳

展覧会名	会場	開催期間	資料名
動物園にて―東京都コレクションを中心に	東京都美術館	2023年11月16日～1月8日	・IA001-003-048「教務雑書綴」 ・IA001-003-097「授業関係書類　教務掛」 ・IA001-003-110「諸印刷物教務掛」

4. 普及活動

4-1. 大学教育の担当

① 2023年6月27日　第3回クリエイティヴ・アーカイヴ演習：東京藝大のアーカイヴ「東京藝術大学の歴史―東京美術学校―」（担当：浅井）

本授業は、東京藝術大学の前身である東京美術学校の歴史を学ぶことで、大学が蓄積してきた歴史を学生に伝える機会を提供することを目的とした。あわせて、本学の大学史研究を支えるGACMAの活動についても紹介し、アーカイブズの重要性について考える機会とした。授業では、当センターが所蔵する資料を交えながら、東京美術学校の創設からその後の発展に至るまでの歴史を説明した。本授業を通じて、学生は東京美術学校の歴史的背景と美術教育の発展について理解を深め、大学史資料の重要性を学ぶ機会を得た。

講義内容

・東京美術学校の設立と背景
・東京美術学校の教育と制度の変遷
・GACMAの活動と大学史史料の保存

② 2023年3年10月4,5日　公開講座「歩いて分かる藝大の歴史（彫刻編）」

本公開講座は、東京藝術大学上野校地を巡りながら、その歴史を学ぶ機会として企画された。今回は「彫刻編」と題し、日本の近代彫刻の発展や、東京美術学校および東京藝術大学における石膏像の役割について解説を行った。本講座を通じて、参加者は近代日本の彫刻教育と石膏像の関係について理解を深めた。さらに、講義の場として絵画棟の大石膏室を活用し、実際に石膏像を鑑賞しながら歴史的な遺産に触れることで、藝大の歴史をより実感を持って学ぶことができた。

講義内容
・近代日本彫刻の黎明期（担当：古田）
・東京藝術大学と石膏像（担当：浅井）
・ 大石膏室の案内

5.調査・研究活動

5-1.研究会の開催

① 法人文書勉強会
開催日時：2023年12月7日
開催場所：大学本部棟第一会議室
課題： 公文書管理に関する映像の視聴と意見交換

概要：
国立大学法人である藝大では、公文書管理法に則った適切な法人文書の管理を目指し、そのための調査を進めてきた。当センターでは、こうした取り組みを踏まえ、さらに継続的な法人文書の管理体制の検討を目的として、2023年度に発足した未来創造継承センターの関係者とともに、法人文書の管理プロセスを確認した。その一環として、公文書管理に関する過去の映像を視聴し、意見交換を行った。

② 第3回GACMA研究会
開催日時：2024年3月28日
開催方法：オンライン（Zoom）
テーマ：「150周年に向けてどのように歴史をつくるか―文書管理の視点から―」

概要：
第3回近現代美術史・大学史研究センター研究会を開催した。本研究会は、美術学部および音楽学部の歴史を踏まえ、150周年に向けた歴史の継承と文書管理のあり方を検討する場として企画された。当センターは、東京美術学校の開校以来、歴史資料の保存・管理を担い、『東京藝術大学百年史』の刊行にも貢献してきた。2024年4月から

「未来創造継承センター大学史史料室」として再編成されるにあたり、藝大の歴史をどのように形成し、継承していくかが重要な課題となっている。本研究会では、史料を扱う文書管理組織の視点から、藝大の史料と歴史の関連について報告と提案を行った。

プログラム：

15:00～15:05　ご挨拶　古田亮（近現代美術史・大学史センター長）

15:05～15:20　発表①「東京美術学校の歴史はどのようにつくられたのか―『東京藝術大学百年史』と大学史史料―」芹生春菜（近現代美術史・大学史センター 学術インストラクター）

15:20～15:35　発表②「東京音楽学校の歴史と大学史史料―記録の継承および教育・研究資源としての可能性―」仲辻真帆（大学史史料室 非常勤講師・学術研究員）

15:35～15:50　発表③「藝大の歴史をどのようにつくっていくか―法人文書との関連から―」浅井ふたば（近現代美術史・大学史センター 学術インストラクター）

15:50～15:55　ご挨拶　毛利嘉孝（未来創造継承センター長）

16:00～16:30　質疑応答・意見交換

5-2. 外部研究

当館所蔵資料は、外部の研究機関・団体による研究・調査に広く活用されている。本年度における主な研究利用の実績は以下のとおりである。

利用機関・研究代表者：

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部

菊池理予（東京文化財研究所 無形文化遺産部 主任研究員）

研究目的：

無形文化遺産（工芸技術・染織分野）の保護に関する調査研究

利用対象資料：

CA009 中村勝馬関係資料

研究方法：

当該資料の中から、戦時中の丸芸・丸技の資料（昭和17～24年）、および文化財保護法が制定され、選定無形文化財の制度が施行された期間（昭和25～29年）に注目し、デジタル化を行うとともに、内容把握を実施した。

利用期間：

2023年7月～2024年3月

研究成果の公開状況：

石原真理／菊池理予「「中村勝馬関係資料」から見た工芸技術保護の実態Ⅰ」『無形文化遺産研究報告』第18号、2024年3月、87～99頁。

6. 業務日誌（2023年4月1日～2024年3月31日）

4/3	GACMA定例会議
4/7	前室で展示開始（～5/7）
4/10	大掃除
4/17	諸新聞切抜研究プロジェクト打合せ
5/8	ネットワーク機器点検
5/9	定期清掃
5/16	クリエイティヴ・アーカイヴ演習打合せ
5/24	松田権六関係資料を整理のため出版文化社へ引き渡し
5/29	諸新聞切抜研究プロジェクト打合せ
6/6	定期清掃
6/12	諸新聞切抜研究プロジェクト打合せ
6/12	外部研究（東文研共同研究）打ち合わせ
6/15	法人文書勉強会参加
6/27	クリエイティヴ・アーカイヴ演習（GACMA担当授業）
7/3	諸新聞切抜研究プロジェクト打合せ
7/11	定期清掃
7/18	外部研究（東文研共同研究）打ち合わせ
7/25	GACMA運営委員会
7/31	GACMA定例会議
7/12	定期清掃
8/8	収蔵・保存環境整備、虫害対策
9/14	定期清掃
9/28	松田権六関係資料納品
9/28	公開講座試写
10/4	公開講座1日目開催
10/5	公開講座2日目開催
10/12	定期清掃
10/19	学内法人文書調査
10/26	東京都美術館へ資料貸し出し
11/2	消防点検
11/7	定期清掃
11/20	GACMA定例会議
12/7	法人文書勉強会
12/25	大掃除
1/6	東京都美術館より資料返却
1/18	デジタル化資料引き取り（堀内カラー）
1/30	定期清掃
2/7	GACMA研究会打ち合わせ（オンライン）
2/8	大学史史料室と布製品保存環境について情報共有会
2/15	定期清掃
3/12	定期清掃
3/13	消防点検
3/18	定期清掃
3/26	藝大校歌再生活動の展示に資料貸し出し
3/28	藝大校歌再生活動より資料返却
3/28	第3回GACMA研究会

紀要

［資料紹介］文部省工芸技術講習所の日誌　浅井ふたば

文部省工芸技術講習所は、1941（昭和16）年1月、東京美術学校（現・東京芸術大学美術学部）内で開所された産業工芸に関する専門的な研究教育機関であり、本学におけるデザイン科の源流の一つと位置づけられる。本講習所は、東京美術学校において初めて産業工芸の分野に特化した研究が組織的に展開された場でもあり、戦時下における芸術教育の重要な実践例として注目される。

戦時下には、軍需産業への人材動員や学徒出陣によって多くの生徒が徴兵され、東京美術学校では実質的に授業が行われていなかった。このような状況下において、東京美術学校工芸科の若手教員たちは、伝統的な美術観にとらわれず、実用性と芸術性の統合を追求し、戦時下の生活と結びついた生活用品の制作や、いわば「デザイン」と呼びうる実践に取り組んだ。本講習所は、まさにそのような活動の拠点として機能し、戦時下という困難な状況にあっても美を追求する教育と研究を絶やさなかった点で、例外的かつ貴重な存在であった。

本講習所では、当初は東京美術学校内の教室を使用して講義や実習を行っていたが、戦局の悪化に伴い、1942（昭和17）年から1945（昭和20）年にかけて岐阜県高山市に疎開し、現地に臨時教室を開設して教育活動を継続した。高山での臨時教室では、生徒約10名が陶芸組と木工組に分かれ、それぞれ地場産業として成り立っていた窯業および木工業の工場に通い、生活用品の製作を通じて産業工芸の技術と理念を学んだ。

本稿では、昭和17年の臨時教室において作成された日誌「岐阜県高山市臨時出張講習日誌」を紹介する。臨時教室は昭和17年から昭和20年まで続いたが、日誌が現存しているのは昭和17年および昭和18年のものであり、本稿では昭和17年分を対象とする。これらの日誌は、戦時下にあっても工芸教育が継続されていたことを示すとともに、高山における臨時教室での教育活動の実態を伝える貴重な記録である。なお、本日記には、以下に示す日誌の記述に加え、事務書類、送付された書簡類、新聞記事などが添付されている。また、日誌の記入は同行した教員が交代で記録しており、4月17日から4月29日までは中田満男、4月30日から5月14日までは吉田丈夫、5月15日から6月16日までは戸谷純之助、6月17日から6月25日までは再び中田満男、6月26日から7月6日までは再び吉田丈夫、7月7日から7月22日までは内藤四郎、7月23日から9月6日までは再び中田満男が、それぞれ記録を担当している。

文部省工芸技術講習所の概要については『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』（第3巻、ぎょうせい、1997年）を、また、その設立背景を含めた詳細な考察については拙稿「文部省工芸技術講習所と東京美術学校」（『東京藝術大学美術学部紀要』第55号、東京藝術大学美術学部、2020年12月）を参照されたい。

岐阜県高山市臨時出張講習日誌　昭和17年

凡例

・翻刻にあたっては、漢字は原則として新字体に改め、仮名遣いは原文のままとした。
・原文中の誤字脱字は原文のまま記載した。
・改行については原文を尊重し、そのまま反映した。
・句読点のない箇所には、読みやすさを考慮して適宜補った。
・執筆者による補足は、［　］で示した。
・判読不能な箇所は、■で示した。
・日誌の罫線外に記された追記部分については、フォントサイズを小さくして示した。
・個人情報に該当する箇所は、一部省略した。

四月十四日　晴　夜風強く肌寒し

東京駅十一時四十五分発列車にて出張講習の希望を胸にひめて出発す。人員は引率者中田、一部藤本、二部黒木、黒瀬、島村、大隅、青木、岡本、山下、加納の十名。内藤、吉田両氏及各務君の見送りを受く。

四月十五日　快晴

午後〇時四十五分高山着、駅に商工会前田光二郎氏、中田太仲氏の出迎を受け一同と中食後一応保寿寺に落付後、祭り見物に出かける。県庁前の広場に集りたる屋台（山車）を見る。古雅にして優美、一面素朴なる郷土味を持つ。それ等屋台及祭行列を面白く見る。今日の高山は一天雲なき快晴にて高原の濁りなき陽光は目にいたき程にて、アルプスの白き全盛の山桜等一同の感動をそそる事切なるものあり。
祭見物の帰路藤本と小生は茶道具火鉢、炭等を貸りに兄の所に立寄りそれ等を用意して寺に帰る。一同も帰り来りて荷物を整理し室を掃除して初めて落ち付く。
保寿寺は城山の中腹、市を眼下に見下しアルプス其他四囲の山波を一望に収め得る閑静な所、夕映の桜花ことに奇麗なり。
就寝十時。

四月十六日　曇

六時半頃一同起床、城山天主台へそろつて朝食前の散歩をなす。
九時頃より寺を出て生徒一同と関係方面の挨拶に廻る。先づ工芸指導所に行き所長に挨拶し所内を参観し今後の実習方法其他に打合せをして、後市役所により産業課長に挨拶し一応寺に帰り中食後渋草窯へ廻る窯主松山氏相憎不在にて工場を参観したるのみにて今後の予定の打合せは明日会見の時になす事とし工場を辞す。
後自由行動を取り郊外散歩及市中の見学に夕食前までの時間を費す。
夜になつて雨降り出し一同雑談の後就寝する。

四月十七日　陽光たまにあれ共小雪まじりの風寒し

午前中渋草窯売店に行き其の製品を一通り見学し、後田中松祐斎氏の工場を参観す。同工場に於て最近の考案なる千巻漆器を見る。千巻とは桧或はサワラの材によるテープ状のものを原型の上に巻きつけて素地を形成する方法にして、今までのロクロによる素地よりも

材料に於て実に無駄なき方法なり。形成して後グリーヴにてかため春慶塗仕上げをなし製品として製産中なり。今後本塗の素地としても幾多応用すべきものありと思ふ。
次に民家を見る。平田城一氏宅、二木長右間、上木甚兵衛氏宅等なり。
午後飛騨木工会社に見学に行く、産報の演劇ある由にて工場は臨時休業なれ共大体に付て参観の便を得る。
夜は小生と藤本、渋草窯松山市に面接し、明日より実修方法及時間に付て打合せをなす。
生徒に対しては小生より絵付の方面について知るかぎりの事を話し、明日の案を作成さす。

四月十八日（土）　晴天なれど早朝は霜を見る

六時半起床、ラジオ体操をなし朝食後渋草窯に行く。
松山氏より生徒一同に少し話をして頂き、下絵付の実修をなす。
八角小皿に各人平均三四枚づつ描く、一同呉須と取りくんで午後三時頃まで夢中なり。二時頃空襲のサイレン四囲の山々にこだましてなり渡る、帰途東京及神戸、名古屋に敵機来襲を知る。
各務君より手紙あり今月末来高の予定
宿舎に帰りすぐ山下旅館より小生宅に電話を申込み、六時半頃通話する事を得たるも詳細なる通話は切断され知るを得づ。「大久保三丁目に爆弾落ち女高師付近にも」までは知り得たるも他は不明。すぐ藤本も自宅に電話す。
其の付近に何等変りなき事を知り得たり。
武樋、加納両人も家庭を心配し電話を申込めども夜十一時頃まで先方出ず。明朝早く電話する事にして一応申込を断る。

四月十九日（日）　天気晴朗

日曜なれば起床七時、それ以前それより以前武樋、加納の二君東京に電話して大した事なしとの返事を得て安心す。
今日は自由行動なり。各自植物写生やスケッチ等をして一日の上天気を楽しむ。心但の所へ又々十三時過ぎ空襲のサイレン鳴る。二時間程にして警戒警報となる。一同二度までも本土をおそはれし事を残念がる事切なり。

四月二十日（月）　曇後雨

六時起床、ラジオ体操をなし朝食後渋草に行く。下絵付とロクロを各自交る交る実修す。
今更ながらロクロのむつかしさを感じ一同実に得る所大なるものあり。
下絵付の出来上りたるものは各自上釉を掛けることも実習す。
ロクロを掃除して帰途につきたるが五時頃一同へとへとになる。
夜は一同楽しく雑談し或はゲーム等して十時頃就寝す。
今日は幸に空中警報なし警戒警報もとかれたり。
渋草仕事中正午過ぎより雨降り出し夜に入りて益々はげし。

四月二十一日　火　曇り

津田先生教官室へ手紙出す
毎朝の予定の行動をなし今日は午前中指導所に行き恩田技手より木材製作法の講義を二時間聞く。

午後は渋草に行きロクロを実習し、又渋草の依嘱により渋草より四角花立と番茶器の素焼の型を与へられてその型に付けるべき図案を紙上計画によりて制作さすべく出題す。
四時半頃渋草にありて三度目の空襲警報あり、一時間余にて警戒警報となり六時半頃それもとかる。
所長より電報吉田君より電報
武樋、加納の二人明朝帰京の予定なり。買物のため夜二人と他に三四人町に出る。所長より二十五日来高の報を受けたり。又山下旅館よりの頼みにより半ヶ月分の生徒の食費を前納す。

四月二十二日　水　曇後晴

七時十七分上りにて武樋、加納の二人帰京。一同駅まで見送りて後朝食を取り、午前中は寺にありて昨日渋草より依嘱された花瓶と番茶器の図案を考案す。当番は指導所に行きて製図板八枚を拝借し来る。午後は渋草に行きロクロの実習をなす。
一同最近に至りて腹がへるのを感ずる由、最初山下旅館にて出されたる丼の飯を食べ切れなかつた事を思へば一同健康になりたる事を認め得べし。夜は一同図案を考へ十時就寝す。
所長より書面ありたり。二十五日来高の予定。

四月二十三日　曇少しはあれど晴

午前中は図案制作、午後渋草に行く。藤本昨夜より下痢、一日病臥する様進め、山下岡本青木の三名居残りて図案制作したき由なれば幸看護のためもあり居残を許す。
渋草仕事中商工会前田氏様子を見に来訪さる。
夕方加藤医師付近まで来診されたるを幸、藤本の診療を御願す。

四月二十四日　金　晴

午前中指導所にて木材制作法の講義を聞く。
午後渋草に行く。松山氏より大分ロクロの手付がよくなつたとの事にて仕上の練習をするために少し乾して置く様にとの異なれば来週より各人三、四個づつロクロの出来上つた型を残す事にする。
なほ今日は先般描きたる染付の窯つめを実習する予定なりしも渋草の方の都合にて明日午後に延す。
夜所長より明日十時十五分高山着の報来る。なほ下呂旅館を申込み置く様にとの事なれば、水明館湯之島館に電話すれ共室なし。

四月二十五日　土　快晴暖かし

午前十時十五分所長、森田の両氏御来高、駅に市代表として辻ノ内産業課長の御出迎へあり。
役所方面は招魂祭にて休日なれども、前日校長の来高を通知し置きたるため、辻ノ内課長もわざわざ出迎頂き次第、なほ指導所にも所長、恩田技手もわざわざ御出勤頂き本所両氏を案内して挨拶を申述べ次に生徒一同と所長及森田先生と食事を共にし、次に両氏を案内して渋草に行き松山氏に挨拶を述べ工場を見学駅に向ふ。二時四十五分発にて両氏京都に御出発なれば各方面に一々挨拶するを得ず残念。
駅に見送りして後、小生渋草に行く。先に廻りたる生徒と落合ひ窯づめをなす予定なりしも時間の都合にてすでに松山市の方で窯づめ終りて火入れをなしたる後なればロクロの実

習をして四時半頃それを切り上げて生徒帰る。其の後小生一人のみ残りてロクロを試みたら帰る挨拶を述べた窯場に行けば丁度一同そろい松山氏を中心に火入れの祝の最中なりしため小生も御馳走になり七時頃寺に帰る。
夜は一同神妙に図案を描く。

四月二十六日　日　快晴暖かし

実に上天気なり。一同写生或は図案の製作をなし日中過す。
今日は役所の御心配にて菓子の配給ありたり。一同久しぶりの甘味をよろこぶ事大なり。
夜は渋草に行き火のたき具合等を見学す。丁度渋草に着したる時は第二の窯の火止をしたる所なりしが第三の窯の火止めまで約二時間程見学す。
一同珍しく又一本の槇を入れるにしても実に真剣なる動作に対して敬意を表し、得る所多かりき。松山氏よりいろいろ雑談的に窯の話等を聞き持参せる今日配給の菓子の一部を開きて有意義なる一夜を過す。

四月二十七日　月　曇時々晴

今日は朝指導所より電話ありて講義は休みとの事、ただ木工の実習の道具材料を買ふために立合つて頂きたきとの事なれば、小生と山下・大隅の三人恩田技手に付いて製材工場其の他道具を買ふ店を廻る。大体道具はそろいたるもなほ全部並ふまでには三日程を要する由。
他の者は寺にありて図案制作をなす。
夜になりて雨降り来る。

四月二十八日　火　雨

雨の中を渋草に行く。一同は雨の如きは意になき如く先を急ぐ。実は今日は窯出しの日なれば先日末描きたるゴス絵の焼上りを少しも早く見たき期待あるためなり。渋草に着したる時はすでに窯出しは初まり居り一同のものだけまだ第一の窯のサヤのまま残り居りたければすぐ取り出し、悲喜交交なり。大体これと云ふ失敗はなく皆■つて焼上りたるも自分の描きたるものの結果を見たる理にして、今後に得る所大なるものありたり。
第二の窯の窯出しを一同手伝ひ労働的な体験をもする。十時半頃までそれをなし帰りて図案制作をなす。
実は本日は午後から指導所に行き実習を初める予定なりしが、指導所にて先般拝借せる図板至急に必要との事なれば先づ描きかけの図案の切りをつける方急務と思ひ寺にありて図案作製す。
吉田君より夕七時到着の報あり。
一同と共に駅に出迎へ帰りて雑談或は図案製作等任意に夜を過し就寝す。

四月二十九日　水（天長節）　快晴

今日は生徒は休業なり。然し図案のおくれたる者は制作に専念す。小生と吉田君は各方面に挨拶に廻る。
帰りて吉田君と事務の引つぎをすませ、次期の時間割の打ち合わせをする。
其の間力の及ぶ限り色々に計画し、生徒に対しても不満もなく或る程度引つぱつて行けた事を有難く思ふ。
夕食の時に山下旅館にて天長節の祝を兼ねて小生の送別の意味で酒を出され一同いい気持ちになる。

以上、中田満男記

四月三十日　木曜　快晴

午前渋草。
松山氏依頼の番茶器及花立に付加するべき図案完成したる為松山氏に製作上、経済的立場より御批評を乞ひ尚参考になる意見を承はる。図案の内、四・五点松山氏が制作に移されることになる。
轆轤実習
午後指導所
始めて木工実習にかかり恩田氏の指導にて道具作成。
図板五枚を指導所に返還す。
指導所より図案依嘱さる。
日本料理に使用する為のオードブルセット図案を渋草青磁、春慶塗を併用して行はるるものなり、五月十六日迄。
中田氏午後八時四十分発の汽車にて帰京の途に就かる。小生他一同御見送りする。
中田氏には高山に出張移動■来凡ゆる不便を忍んで生徒の安らけく実習の実現に向つて努力、その努力よく報ひられ大体此方に於いて行はるるべきものの基礎が出来て来た。生徒は良く中田氏の命に服し中田氏又よく生徒に対して親兄の如く愛情を示されたる模様なり。小生只中田氏を模範として只その轍をふむのみ。一部生徒藤本は助手としてよく協力に努め居るを認む。
実習は軌道に乗り小生滞在期間中の進行予定を左の如く作るを得たり。

実習
　轆轤練習　若干を仕上乾燥の上素焼せしむ
　型物実習　仕上乾燥の上素焼せしむ
　上絵付及下絵付練習
　　以上渋草にて午前中
　道具作成及小箱制作
　　以上指導所にて午後

図案課題

陶板・小箱・鉢	型物実習のための形態図案
茶器セット又は花器	渋草に依嘱する為のもの
壺、鉢	松山氏に轆轤制作依頼の為のもの
小箱	木工の実習の為のもの
オードブルセット	指導所より依嘱の日本料理に向き、渋草青磁と春慶塗を応用、併用せしめるもの

講義
　木工制作法　毎週月・金曜午前十時より恩田氏により行ふ

見学
　渋草窯
　曲子、曲木、町工場

五月一日　金曜　曇後晴

渋草定休日なる為午前中帯止絵付の図案をなす。
午後指導所にて道具作成

［空欄］氏より古い高山のことに就いて、又春慶渋草のことに就き種々興味深きお話を一時間余り承はる。
山下旅館に食費半ヶ月分前納す。夜はゲームに興じ後高山に於ける実習に就き一同真剣なる討論を行ふ。
当地に於ける規則正しき生活の為か健康に適する土地なる為か体重の増したる者多し。皆元気横益せるは何よりも喜ばし。

五月二日　土曜　快晴

午前、指導所にて引続き道具作成、恩田氏より実習助手をつけて貰ふことをお願ひし便宜をはかつて戴く。
前田氏を訪問。机、椅子借出のこと、渋草戸田氏窯及び日下部氏訪問の御案内を乞ふ。辻の内産業課長をお訪ねしたるも留守。
午後、前田氏の御案内にて渋草戸田氏の窯見学、後松山氏の所で轆轤の練習。
皆非常に疲れ、夜は静かに手紙書くもの多く、早く寝に就くものもあり。

五月三日　日曜　小雨後曇

午前十時半頃公会堂より机六椅子十二を運ぶ。
午後からは渋草へ行くもの、街に古物を探しに行くもの、写生に行くもの、図案するもの、昼寝に過すもの等。

五月四日　小雨後曇

指導所は遠足で休業。
朝から渋草へ行き松山氏に型物の説明を乞ふ。
轆轤をやるものの他は轆轤依頼の型、型物の原型図案等をねる。轆轤には皆大部慣れて来た様である。六時帰宿。疲労多し。警戒警報になる。
小生渋草で仕事をしながら思ふに、吾々は職人としての修業を積まねばならぬ。生徒等の不平、愚痴を聞きながら、自分は決して不平等を言はぬ人間になる様修業したいと思つた。
自我からは大きな仕事は生れない。

五月五日　火　快晴

午前　図案
午前　十時ニ十分より木工制作法聴講
午後　四名木工実習
　　四名轆轤実習
夕刻警戒警報解除。
今日は高山斐太神社の祭礼にて街は賑はふ。
夜は皆弁当箱購入傍々散歩に出る。

五月六日　水　快晴

三名　午前・午後　木工実習
一名　午前　木工実習
　　午後　轆轤実習
四名　午前午後　轆轤実習

講習所焼印出来上つて来て、山下柄をつける。明日東京に発送。
激しい実習が続き皆疲労を覚えて居る様子、しかし意気益々軒なり

五月七日　木　小雨

三名　午前・午後　木工実習
五名　午前・午後　渋草実習
東京より油土、鋏［はさみ］、箆［へら］等送り来る。

五月八日　金　小雨時々曇

午前十時ニ十分より木工制作法講義
午後　四名　木工実習
　　四名　渋草実習
夜生徒四名と共に恩田氏宅を訪ね、午後十時迄草餅等御馳走になりながら恩田氏の懐旧談等伺ふ。
今夜より午後九時以後を静粛時間とす。その他共同生活維持のための簡単なる規則を作り当番をしてその責任をとらしむることとす。
高山出張期間中の（七月末迄の）演習課題を左の如く与へ進行せしむることとす。
木工図案課題、渋草図案課題、春慶図案課題、その他の図案課題をそれぞれ数種挙げ、その中木工実習専攻の者は、木工課題中より三点以上、春慶課題中より二点以上、他の課題より各一点以上を。渋草実習専攻の者は、渋草課題中より四点他の課題より各一点以上を。木工渋草両者実習のものは、渋草課題中より三点以上、木工課題中より二点以上、他の課題中より各一点以上を夫々自由選択うをして図案又は製作を為さしむることとし図案は毎月二十五日迄に二点以上宛呈出せしめることとす。
実習進行予定は建てること困難なる故随時教官、指導者（木工は恩田氏、渋草は松山氏）、実習責任者（木工は山下邦都、渋草は黒木豊）等の協議にもとづき教官指示のもとに進行せしむることとす。
その他のことは就いては教官適宜指示して之を行ふこととせり。

五月九日　土　曇

木工実習三名、午後恩田氏と共に道具買集めをする。
渋草実習五名内二名、午後図案。
生菓子配給券三枚、干菓子配給券九枚を受く。早速買求め分配、皆大喜び。

五月一〇日　日　快晴

休日なるも、三名渋草へ実習。
他は洗濯、読書、図案等に一日を過す。

五月一一日　月　快晴

午前十時ニ十分より木工製作法聴講。十二時五十分着の汽車にて来高の一部各務君を一同で迎へる。
木工実習二名
渋草実習一名
他は図案
夜津田、加藤、中田、戸谷の四氏来高の由の電報、来信あり。

パン配給券二十枚受ける。
夜九時三十五分着の汽車にて津田、加藤、中田、戸谷各先生、佐藤書記来高。一同で出迎へる。前田氏も駅迄出て来られる。津田、加藤、佐藤三氏は直ちに中井旅館に入られる。保寿寺では一同中田、戸谷両先生を迎へて津田先生よりキヤンデー、中田先生奥様よりバナナを戴きながら話に遅く迄大賑ひ。

五月一二日　火　曇時々小雨

三名　木工実習
六名　渋草実習絵付
津田先生を代表に加藤、佐藤、中田、戸谷、小生同行挨拶に廻る。
市庁にて森市長、辻の内産業課長、前田氏に御礼申上げる、森市長より春慶塗櫛、コウガイ等を見せて頂く。
次で木工指導所を訪ね井口所長、恩田技手に御礼を述べる。生徒の実習を視察。
昼食を山下旅館にて先生、生徒一同で賑やかにとる。
加藤先生より轆轤のことで種々生徒にお話あり。
午後渋草松山氏をお訪ねする。親しく御礼を述べ工場内見学、生徒の絵付実習視察。
加藤先生より絵付の技術指導あり。
後戸田窯見学。

五月一三日　水　曇

午前中
　三名　木工実習
　五名　渋草実習
津田、加藤、中田、佐藤氏等と森市長宅にて陶磁器、春慶塗器を拝見。
市産業課招待にて津田先生を始め各先生、生徒一同保寿寺で昼食を御馳走になり津田先生の御礼の御挨拶の後、工芸関係者との座談会あり。午後二時半閉会。
終つて津田先生の生徒宿舎の模様を見られ、後生徒達との座談会に移り津田先生、加藤先生より各激励、注意の御言葉、陶磁器研究方法に就いての御話あり。
津田先生執筆により「文部省工芸技術講習所出張教室」の看板出来上る。
戸谷君昨日より頭痛の為臥床。

五月一四日　木　曇時々小雨又は晴

三名　木工実習　小箱制作始まる
四名　渋草実習
一名　図案
岡本　頭痛の為一日臥床
戸谷君との事務引継を終り、離高挨拶に恩田氏、松山氏をお訪ねする。
此処に小生第一回の日記は終ることになるが、四月三十日より十五日間、無事に過せたことは生徒諸君よく自らの仕事に対する熱情自治精神の発揮により、何等愚凡の小生手を下さずとも行ふことの出来た原因であり又小生をよく助けてくれたことに依り、最初に思つたより楽な気持で居れたのは、全く感謝すべきことであつた。
益々その仕事に対する熱を上げて予期以上の成果を挙げ得る様、生徒諸君の健康を祈つて筆を置く、以上。
吉田丈夫記

五月十五日　金曜　曇後晴（暁極めて寒し）

六時起床、ラジオ体操。
午前九時八分津田先生、中田先生、吉田先生高山発帰京せらるる。一同駅迄見送り。
加藤先生のみ残留せらる。
一同駅より直ちに指導所に赴き、例の如く恩田氏より木工製作法の講義を受く（十時二十分～正午）。本日の講義内容は、燕留（組手の一種）、矧合せ（芋矧、相缺矧、木刻矧、引独 鉆矧）、端嵌（製図板の端嵌）なり。
昼食後、日下部氏の御宅を訪問秘蔵の珍品（焼物、一位細工、漆器、石器等）並に御宅の飛騨古式建築を拝見、加藤先生、並に渋草の松山氏、指導所の恩田氏も御同道加藤先生より特に焼物に就いて詳細なる御説明あり一同益せられるところ■■多し。
尚一位細工の初代亮長の策を拝見したる後、帰途「津田一位細工店」に立寄り、現主人の作を拝見・比較して其味深し。
四時半、日下部氏宅辞去。帰途一同加藤先生より「ミツ豆」の御馳走になる。
本日菓子の配給あり、一同喜ぶ。
小生山下旅館より保寿寺へ居を移す。
体の調子次第に回復す。
本日は滴草は工場の休み、指導所は日下部氏宅訪問で実習は全部休み。
十時就寝。

五月十六日　土曜　晴（気温常襲）

六時起床、一同ラジオ体操。
本日は渋草窯の火入れにて生徒は早く出掛ける（火入れ時間午前八時）、加藤先生の実地指導あり（窯詰め、窯焚、錦窯、絵具、陶板、花瓶の実地指導）。
小生は本日前常番が指導所より依頼されたオードブルセット図案の約束期日なる為午前中指導所に下図を持ち行く。依頼者与瀬氏は出張先より未だ帰られず。所長に提出其の批評を乞ふ。内三枚認められ之を再び練り直して清書そ、月曜に手渡す約束す。
午後小生渋草に出掛け生徒と共に土を捏ねる、生徒は轆轤にて陶板制作実習。木工組は午後飛騨古川迄道具を買ひに出掛ける（山下、大隅、黒瀬の三君）。指導所の名義にて購入従前通り、価格略五十円位。夜は土曜の晩とて一同歓談す。
十時就寝。

五月十七日　日曜　曇時々小雨（気温稍寒し）

日曜につき七時起床、ラジオ体操。
九時八分高山発にて加藤先生帰京せらる。一同駅迄御見送り申し上げる。
渋草組の有志は日曜日をものともせず実習に出掛ける。残留組は寺にてオードブルセット図案並に市長より拝借の春慶塗櫛、髪挿の模写をなす。市長よりの使あり櫛及髪挿しを御返しする。
渋草組夕方早めに引上げ来りオードブルセット図案をする。
本日、城山広場に於いて岐阜県下中等学校の連合運動会ありて、出張教室前終日賑ふ。夜図案継続。
一同の出資にて七輪・屑籠・塵取を購入、一人前の負担十五銭。
十時就寝。

五月十八日　月曜　晴後曇り（気温低し）

六時起床、ラジオ体操。
十時迄一同指導所より依嘱せられしオードブルセット図案を作成完成す。直ちに指導所にお渡しする。工作上不都合と思はれる箇所に原案の意志を尊重しつつ修正を加へ、試作として見るとのことなり。十時ニ十分よりの恩田氏の木工製作法は会議の為休講となる。
午後木工組は指導所にて実習（工具作成、カンナの歯、カンナの台）。渋草組は藤木、黒木は実習に出掛け、前日轆轤にて作成せし陶板を削る。仲々厄介な仕事の模様。他は寺に残りて図案作成（月曜午後は図案実習）。本日パンの配給ありたり。木炭の配給もあり。立替二円二十一銭也。
十時就寝。
本日各務君帰京す。

五月十九日　火曜　雨（時下寒し）

六時起床、ラジオ体操は出来ず、代りに各自の机下入念に掃除。
午前中木工組の監督、工具の操作が大分上達したと恩田氏に言はれる。黒瀬君は莨［たばこ］箱、大隅君は木口台、留台、山下君は小箱、粘土台の作成中。
午後渋草へ行く、雨の中仲々困難、皆中々熱心に実習す、午前中窯出しの手伝ひをしたと云ふ、生徒の作品も出て来る、いびつのもの、小さき孔の多きもの、呉須の発色悪しきもの、焼成に依る。色及び形態の変化（焼縮み）等初めての作品として良品少し、されど短時日の間にそれだけ出来るのは成績向上賞に値する進歩ぶりだそうである。実技は黒木依然トップ、藤本仲々熱心、島村、渡辺之に次ぐ、之等の連中は目下陶板の製作中。
十時就寝。

五月二十日　水曜　雨（極めて寒く冬の如し）

雨天にてラジオ体操出来ざる爲、起床三十分遅らせて六時三十分起床。昨日に続く今日の雨天、加ふるに冬の様な寒さで、極めて張合悪し。雨天の日は渋草組通ひは仲々つらく、生徒各自の為の実習とは云ひながら同情される。然しよく仕事に対する情熱に依つて此の困難を克服して居るのは嬉しい。木工組は近距離の為、渋草組の■める困難からは免れて朝などもスムーズに出掛けて行く。
例に依り小生午前中は指導所に行き、木工組の監督、黒瀬の莨箱下色つく、山下の小箱も形態完成、大隅工具の整調に大童、三者仲々の仕事熱心。
午後渋草に行く。雨漸く晴れ風強くなり寒気加はる。工場では連中水鼻を垂らしながら轆轤で頑張つて居る。朝は出渋つても仕事場に入るとしつかり実習に打込んで居る。藤本が土の捏ね方を松山氏から褒められて喜んで居る。仕事に精励する一つはづみになることなので大へん結構。黒瀬の番茶器続々と焼成今日は錦窯を出た完成された湯呑を見た仲々よし。
本日はパンの配給あり一同喜ぶ。
木工具の立替え八十銭。
十時就寝。
古川町田辺百貨店より木工具の仕切書受取る（山下を経て）四十四円九十四銭也。

五月二十一日　木曜　快晴（暁寒し）

六時起床、ラジオ体操。

夜来の風に吹払はれて快晴、相当な寒さなり。寒くても天気なれば何事を為すにも張合良し。此の頃は早寝早起が板について皆床離れよく今朝なぞラジオ体操第一・第二・第三とやつて、尚七時の朝食迄相当の時間を残す程なり。腹が空いて食事楽しみなり。
小生午前中指導所。午後渋草は例の通り共に実習科目に変化なし。皆仕事に馴れる努力。黒瀬の番茶器続々出来つつあり。周囲の他図案に比して矢張り確然たる区別の認められたるは嬉し。
十時就寝。

五月二十二日　金曜　快晴（暁寒気厳し）

六時起床、ラジオ体操。
猛烈な寒気に一同慄へ上る。然し元気にラジオ体操をする。今日は十時から指導所で恩田氏の木工製作法があるので、渋草行は午前中休み、十時迄の時間を寺にて図案に費す。木工組は朝から実習に出掛ける。黒瀬の莨箱塗装完成、次の小箱の製作に移って居る。
恩田氏の本日の講義は板の反張を防ぐ方法の残部として倹飩蓋、馬乗枘、片面クデ腰、両面クデ腰、四留等、新講として曲木、及曲物の話ありたり。
本日は図案日なるも轆轤の使用期間が最早一週間程なる為渋草組は実習に出掛ける。黒木器用に仕事を進捗させれば、藤本花瓶の成型に苦労し西山氏（弟）の応援を得て漸く完成す。他の者は陶板及茶碗の成型を行ふ。
黒瀬の番茶器続々焼成、上絵の赤が少し濃過ぎ且つ綿製分量が多過ぎて若干重苦し、赤は鮮明ならず寧ろライトレッドなり、却つて呉須丈けの半成品に爽やかな気品と落着きあり。上絵の赤をもう少しさらりと上げられぬものか。
夜は一同図案に精出す。
十時就寝。
本日大阪毎日新聞記者、渋草に於て実習中の本所講習生を訪れる。

五月二十三日　土曜　快晴

六時起床、ラジオ体操。
早朝は非常な濃霧であつたが、八時頃より晴れ始め、午頃には絶好の早月晴となつて皆を喜ばす。空気が澄んで居る故か空の色・四方の色が極めて鮮明で美しい。気温も快適である。
今日は土曜日なれど木工組、渋草組共に一日頑張る。小生午前中、指導所に行く。
高山市主催のハイキング旅行の募集、指導所を通じてあり、山下、黒瀬、大隅君三名参加希望、許可す。期日は明二十四日日曜日なり。
就床十時。
渋草に於ける実習状況二十三日大阪毎日新聞に掲載さる。

五月二四日　日曜　曇後晴

一般起床七時、体操休み。
山下、黒瀬、大隅の三君五時起にて高山市主催のハイキングに出掛ける。目的地は大尾根、夕方六時帰還す。
渋草組は日曜にも拘らず実習に出掛ける。他に特別雉なし。

五月二十五日　月曜　晴・曇

六時半起床、ラジオ体操。
連日実習に馬力をかける為六時起床は多少困難なりと認め、六時半と改める。然し一同の床離れよく、洗面、ラジオ体操を実施しても七時には朝食が出来る。早起きの習慣に漸く馴れて来た様子なり。
今日は十時から飛騨木工の見学は作業休みの為、実際の授業を見学為し得ざりし為再び、此を企つ。恩田氏にも御足労を願ひ十時飛騨木工集合、社員、池之端宗一の御案内にて曲木（折畳式椅子）の製作状況を見学。その能率的に合理化された生産機構に深い興味を感じた。尚同会社のベニヤ板製作状況も併せ見学、正午に見学終了。
本日は図案日なるも、実習の都合に依り木工組は指導所へ、渋草組は工場へ夫々、午後出掛ける。各自実習本腰となり、自発的努力続き気持よし。夕方五・六時頃迄みつちり頑張り、疲労して宿舎に帰る。
パンの配給あり、一同喜ぶ。量豊富なり。

課題図案提出（各自二枚）

藤本能道（一部）　上絵盛皿（円形）、盛皿図案（円形）
黒木豊　（二部）　盛皿図案（角形）、菓子盛器図案（円形）
島村慶二（〃）　上絵菓子鉢（丸物）、盛器（角形）
渡辺紀一（〃）　Berry Set（円形皿）、茶器（呉須、茶碗）
岡本栄司（〃）

山下邦都（〃）　雑誌入（春慶塗）、図案（曲物）、春慶塗小箱図案（丸及角、一枚に二点を収む）
黒瀬健次（〃）　木工莨箱図案（一枚に二点を収む）、春慶塗菓子器セット図案（角鉢、角皿）
大隅弘進（〃）　小箱図案（角形）、マガジンスタンド図案（縮図1/3）

五月二十六日　火曜　晴後曇

六時半起床、ラジオ体操。
実習例の如し。午前中指導所に行き愚作オードブルセット（佃煮入）、図案（黄春慶、磁器組合せ）を代情氏に見て頂き批判を乞ふ。餅屋は餅屋の譬へ種々工作上の見地から妥当性ある意見拝聴、敬服す。実用品としての工芸品は個性よりも客観的立場よりする。機能的、威性的両面の検討が大切、その立場から一案を提出して皆で検討、推搞すること最も肝心なり。
午後渋草へ行く、皆轆轤で作つた花瓶其の他を削り、仕上げを行つて居る、今日から我々生徒の為に手轆轤一台新設として下さる。之は仲々六ヶ敷い操作である。惰性をつけて置いては仕事をする、敏活なる動作を要する。皆苦しみながらもどうにか形にして行く。
削り仕上げでは可成り失敗ある模様、肉厚み均一ならざる為、或ひは、中心の取れざる為穴にあくもの等あり。
夜は図案に精出す。
就寝十時。

五月二十七日　水曜　雨・曇・晴

六時半起床、ラジオ体操。
実習状況例の如し。

小生午前中講習所宛詳報を認める。便箋十枚、外に木工具購入仕切書並に大毎所載の渋草実習記事同封。
指導所へ廻り、更に渋草へ廻る。本日から本職二人の轆轤操業始る。熟練の手腕に暫し恍惚時の移るを忘れる。今迄六時迄の労働時間本日から五時迄と改正の様子従つて生徒も実習も五時打切り。
夕食後の一時の座談の際、鋳物に関するくだけた話を時折して欲しいとの意見が出る。積極的な研究的態度を嬉しく思つた。及ばずながら微力を尽すつもりなり。
読売新聞、朝日新聞の勘定を立替へる、合計二円四十銭也。
本日は体のだるい頭の重い、いやな天候なり。朝の雨は午には上り、夕方になるに従つて晴れて来れど気温下がる。山下多少風邪気味なり。
夜は十時就床。

五月二十八日　木曜　晴風強し

六時半起床、ラジオ体操。
暁の濃霧風に化けて、終日天気晴朗なれども風猛烈なり。
木工組は指導所へ、渋草組はその工場へ夫々出掛ける。例の通り。
午前中体力検査の件につき市役所へ相談に出掛ける、五月三十一日の申込〆切で実施は七月になるとのこと。但し中等学校以上在学者はその学校長に於て行ふとのこと本所講習生は如何なる取扱ひを受くべきものか判然せぬので、早速東京の講習所に照会状を出す。
午前中指導所へ一寸まはり、寺に帰つて煙草セツト（灰皿・莨箱組合せ）の図案をなす。
午後該図案を持つて指導所に行き、代情（ヨセ）技手の批評を受ける。試作の一案として受納して下さる。
夕方東京講習所より、小生宛書留を受取る。夜黒瀬、大隅、山下三君、恩田氏（宿直）を訪ふ。後より渡辺も行く。
十時就床。

五月二十九日　金曜　快晴

六時半起床、ラジオ体操。
本日は渋草組削り仕上げ一応片附いて実習休み、終日寺にて図案す。木工組は例の如く出掛ける。十時より恩田氏の木工製作法聴講曲木の残講として基礎学「木材の細胞組織に就いて」の話が始まる。
体力検査の件、黒木、山下、大隅、岡本の四君は高山市にて受験と決定、届書認む。黒木、岡本両君は未成年者につき、小生保護者代人となりて認む。明日三十日提出の筈、島村君は郷里に照会後決定の筈、黒瀬君は本年徴兵適齢で差支へなく、藤本は東京で届書提出済み、小生及渡辺は該当年齢以上で無関係、この旨明日講習所へも通知するつもり、前田さん及び市役所厚生課の方を煩はす。
夜十時就床。

五月三十日　土曜　晴

六時半起床、ラジオ体操。
各自実習に出掛けること例の如し。
小生体力検査の届書提出の為、市役所厚生課へ出頭、黒木、山下、大隅、岡本の四君の届出をなす。此の皆東京講習所へも通知す。

正午、加藤土師萌先生よりお葉書拝受、早速御返事を認める。主として渋草に於ける実習状況の報告なり。
本日島村君、岡本君は寺に残りて図案す。実習組は土曜日にも拘らず指導所、渋草共に一日頑張る。木工組は箱を造って居る。
夜十時就床。
［加藤土師萌より宛てられた葉書が一通、綴じ込まれている］

五月三十一日　日曜　曇後晴

日曜につき起床七時、ラジオ体操休み。
本日は各自自由行動。藤本、黒木両君は日曜にも拘らず渋草に出掛ける。小生も午後渋草へ出掛ける。生徒の仕事のひまに一寸轆轤を廻させて貰ふ。中へ水が溜つて底に亀裂が出る。他の連中は午後より上野平へ写生に出掛ける。夫々油絵一枚づつ画いて夕方六時半頃引上げて来る。夜は寺にて一同図案す。
加藤土師萌先生への御返事投函す。本日で五月も終り、高山に於ける出張教室の生活も漸く板についてきた。夜十時就床。

六月一日　月曜　雨曇晴風強し

六時半起床、小雨降り居たる為体操休み、代りに大掃除する。
本日は渋草は工場休みで、渋草組は寺にて図案す。木工組は例の如く実習に出掛ける。十時より恩田氏の木工製作法、続講「植物（木材）の細胞組織に就いて」。
大隅君軽き風邪気味にて一日臥す。夕方には起きられし程度なり。東京講習所の佐藤氏より会計並に体力検査の件に就いての返信あり。
就床十時。

六月二日　火曜　快晴暁寒し

六時半起床、ラジオ体操。大隅君風邪気味で小生と山下君が代つて号令をかける。小生午前中指導所へ行く。黒瀬は文箱の塗装、大隅は小箱の膠付け、山下は板面彫刻を夫々やつて居る。午後渋草へ行く。黒木は長い花瓶を轆轤で廻して居る。大分延びたところで失敗、藤本は小さな蓋物の蓋の摺合せに苦労して居る。夜は拙宅より送り来し手製の粗菓でささやかな茶話会を開く。十時就床。

六月三日　水曜　晴後薄曇

六時半起床、ラジオ体操。大隅君元気回復して号令をかける。岡本君を除く外例の通り実習に出掛ける。東京講習所より体力検査の件につき返信あり「体力審査の件は照合中、身体検査に就いては目下教務係にて打合せ中」とのこと。
市役所産業課へ菓子の配給券を貰ひに行く。直ぐには頂けず、夕方小使さんが宿迄届けて下さる。特別の御計らひにて、一人につき二人前宛配給さる。一同大喜び。午後指導所へ行く。黒瀬、莨箱を作り別に小箱の赤染料下塗にカゼイン塗装、大隅君も小箱を同様に塗装、別に小箱を作りつつあり、山下本立の製作中なり。
十時就床。

六月四日　木曜　雨

雨天につき七時起床、体操休み。

木工組は例の如く実習に出掛ける。渋草組は降雨激しき為実習を休み、終日寺にて図案す。又各務君から一同宛煙草と菓子を送つて下さる。厚意有難し。一同喜ぶ。午後、小生指導所へ行く。大隅は小箱、山下は本立の塗装、黒瀬は本立の製作を夫々実習して居る。夕方から雨晴れる。気温さ程寒からず。
夜十時就床。
［各務満より宛てられた葉書が一通、綴じ込まれている］

六月五日　金曜　晴

六時半起床、ラジオ体操。
木工組は例の如く実習に出掛ける。渋草組は藤本を除く外終日寺にて図案す。十時より恩田氏の木工製作法の講義、木材の細胞組織の続講、柔組織細胞、樹脂溝、髄線、年輪に就いて。午後藤本渋草へ実習に出掛ける。
加藤土師萌先生より御懇切なる返信あり。
午後小生指導所へ行き生徒より依頼されし謄写版の件恩田氏へお願ひする。暫く雑談。山下の本立塗装完成。今日は当地の月後れの端午の節句で快晴の空に鯉登翻る。今日初雷を聴く。十時就床。

六月六日　土曜　晴後薄曇

六時半起床、ラジオ体操。
木工組は例の通り実習に出掛ける。黒瀬・本立、山下・ブックエンド、大隅・クローバー模様の小箱の製作なしつつあり。藤本朝から出掛ける。他の渋草連中午前中は寺で図案十時過より実習に出掛け、土曜にも拘らず皆終日頑張る。
山崎先生より、高岡工芸見学の為紹介名刺を拝受、又内藤四郎兄よえいも便りを受く。
十時就床。（木工組本日漸く木材を購入せしとのこと）

六月七日　日曜　曇夕方小雨

七時起床、日曜につき体操休み。
本日は各自自由行動、されど藤本、黒木、島村、渡辺の四君は弁当持ちで渋草へ出掛ける。皆轆轤の腕前めつきり上達して居る。自覚した此等の連中は仕事に欲が出て来て居る。何より結構なことである。こうなればしめたもの。進歩も速い。先頃図案し本焼した角細長の花瓶（中田兄、藤本、大隅の図案）、今上絵付けが行はれて居る。焼成が楽しみなり。吉田丈夫兄より封書及奥さん出で一同に佃煮の小包が届く。御厚意辱けなし。当封筒には恩田氏並に松山氏宛書信も同封しあり。明日お渡しするつもり。吉田兄宛早速礼状を出す。十時就床。
山崎先生並に内藤四郎兄に返信出す。木工組も午後実習に出掛ける。

六月八日　月曜　雨後曇

大詔奉戴日につき六時起床、大掃除。
一同東方遥拝。雨天の為体操できず。
十時半より指導所にて恩田氏の木工製作法聴講、春材及秋材、辺材及心材に就いて。木工組の実習、黒瀬本立、再三失敗してはやり直して居る。山下はブックエンド、大隅はクローバー紋小箱の製作中なり。渋草組も午後から実習に出掛ける。今迄に轆轤にて造りたるものは、大半削り仕上げを終り、窯の都合を待つのみ。島村君陶桶(張り合せ）の製作中。吉田兄より依頼の恩田氏並に松山氏への書面夫々お渡しする。就床十時。

松山氏より塑像箆一揃の購入方依頼さる。

六月九日　火曜　晴後曇

六時半起床、ラジオ体操。
実習例の如く出掛ける。午後渋草を見廻る。皆轆轤の仕事を継続す。各細長花瓶最早焼成され、店頭に飾られ居るとのこと。就床十時。
内藤四郎兄に松山氏より依頼の塑像箆葉書にてお願ひする。午後図板の荷二箇到着。

六月十日　水曜　晴雲多し

六時半起床、ラジオ体操。
午前中指導所へ行く。黒瀬は本立の作り直し、山下はブックエンド、大隅小箱の製作中なり。
午後松山氏宅へ角細長花瓶の焼成振りを見に行く。愚生の感想は大隅の図案感覚新鮮で近代味あり、最も好きなり。但し側面にもう一工夫ありたし。色上りの具合は薫んで不良なり。藤本の案は模様と充分マツチせず。一枚の絵画を角物の周囲に捲く場合、殊にその面の狭き場合は仲々六ヶ敷し。色上りは成功の由なれど、窯の呉須、強過ぎ葉の調子弱し逆になり広し。就床十時。
各務満君より一同宛葉書受取る。美校の命により西田正秋助教授の臨時助手として北支蒙彊満鮮の古美術研究に赴くとのことなり。七月より十月にかけての三か月間。

六月十一日　木曜　快晴

六時半起床、ラジオ体操。
体操の後、直ちに一同で到着の製図板のニ荷荷ほどきす。図板十枚と外に引型甲、武力板及び回転心棒。本日は暦の上では梅雨入りなるも、天候は梅雨明けの如き痛快な晴天である。然しかう晴天が続くと、人間は有難いが水の渇れる憂あり。講習所宛最後の通信を出す（岡本君の件、島村君点呼及体力検査の為帰郷（〇時五三分発）の件、花瓶焼成の件、図板受取通知の四件）。尚島村君は二十一日に高山へ戻る予定。実習例の如し。就床十時。
大隅君一役多生の精神を発揮して窯業に関する参考記事のプリントを作り、一部十銭で一同に配布す。御苦労に感謝す。

六月十二日　金曜　晴

六時半起床、ラジオ体操。
十時半より恩田氏の木工製作法、木理に就いての話、通直木理、螺旋状木理、捻れ、対角線状木理、逆目、リボン状木理、波状木理、写眼杢、如鱗杢、牡丹杢、珠杢、葡萄杢、縮面杢、鶉杢、山鳥杢、瘤杢等の工芸的利用価値に就いて。
内藤四郎兄より速達拝受。十四日午後九時三十五分高山着の列車で来高の由、岡本君の容態次第に快調に向ふ。実習木工組は黒瀬の本立組立完成、或大隅のクローバー紋小箱成形、山下ブックエンド又同じ。渋草の実習、藤本、黒木、渡辺の三人のみとなる。午より出掛ける。十時就床。

六月十三日　土曜　晴後曇

六時半起床、ラジオ体操。
空梅雨で寺の井戸水不十分。朝の洗面に不自由なり。小生、藤本、渡辺、各務君より御送付の本場のコーヒーの刺激で多少腹具合をこわす。然し大したことなし。黒瀬君〇時五十

三分の汽車で今日明日、金沢へ帰京す。月曜早朝に戻る筈なり。午後指導所を見廻る。大隅箱二つ塗装前の磨き、山下ブックエンドカゼイン下塗す。
飛騨国有林材協会より檜、桂、栓の板購入、その入荷票、出荷票を受領す。帰京後会計へ差出すつもりなり。十時就床。

六月十四日　日曜　雨夕方雨止む

七時起床、体操休み。
日曜の雨天なれど皆例の如く実習に出掛ける。小生午前中渋草を見廻る。黒木細長き花瓶の削り仕上げ、渡辺蓋物の削り仕上げをやつて居る。午後指導所へ行く。山下のブックエンド代用黒漆塗装が行はれ、大隅の小箱代用紅春慶の塗装が施されてある。遺憾乍ら代用漆の為気品極めて低劣なり。日曜につき、大隈、藤本は自由行動で絵の勉強をして居る。本日を以て焼成一人で出張教室を預す貴責を終る。腹の底からあくびの出る思ひである。午後九時三十五分着で内藤兄来高さる。一同駅迄出向へる。十時就床。
内藤四郎兄に依頼せし品、日誌用紙、ポスターカラー（黒）、彫刻刀、画用紙及松山氏の塑像箆持参せらる。ノートは手に入らずとのことなり。他に一同へお土産として佃煮其の他の食料を下さる。

六月十五日　月曜　雨後晴

六時半起床、雨天につき体操休み。木工組は例の如く実習に出掛ける。本日は岐阜県知事の当地観察で午前中指導所も忙しく、従つて恩田氏の木工制作法は明日に延期。朝、日下部氏より夜六時半に出張教室一同招待の電話を頂く。午前中内藤兄へ種々事務の引継ぎを終る。午後市役所を訪ね、前田氏、辻の内氏、橋本氏、北澤氏へ内藤兄を紹介、同時に小生暇乞ひす。松山氏宅へ行き同様、松山氏御留守、奥さんに宜しくお願ひす。指導所へ行き、所長、恩田氏、代情氏に紹介及暇乞ひす。これにて小生為すべき一切を終る。本日は渋草の休電日渋草組自由行動夫々油絵なぞ画く。
夜日下部氏宅を訪問す。種々歓談す。就床十時。
日下部氏所蔵の陶磁器数多く拝見す、松山氏を招き生徒図案の花瓶及番茶器日下部氏に見て頂く。

六月十六日

六時半起床、ラジオ体操。
十時半より指導所にて恩田氏の木工制作法、節、木材の重量、木材中の水分の在り方（二つの型あり）等に就いて。午後内藤兄と中田太仲氏及渋草工場へ紹介並に暇乞ひに行く。それで小生の為すべき総て終る。三十五日間顕著なる業績も残せず恥ずかしき限りなれど、若輩者の小生曲りなりにも任期無事終了せしこと、ただひとへに生徒諸君の自覚せる行動に依るものと感謝する次第なり。又その一ヶ月余の体験は小生にとつて尊き人生勉強の第一課にて得ることの極めて多し。荷を下して型軽し。
以上、戸谷純之助記
内藤兄御持参の塑像箆松山氏（弟）へお渡しす。明日十七日一番で高山を発ち、高岡の工芸事情見学、高岡に一泊、翌十八日朝の汽車で帰京の予定。

六月一七日　水曜　晴

戸谷氏早朝高岡へ出立。
六時半起床、ラジオ体操。一同渋草と指導所へ行く。午後より病気中なりし岡本はじめて指導所見学に行く。夜分黒瀬、山下、大隅、岡本、渡辺にて恩田氏宅へ行く。十時半就寝。

六月一八日　木曜　曇後雨

六時半起床、ラジオ体操。
皆それぞれ出掛ける。十時頃より両指導所にて恩田氏より木材統制のお話をきき、東京講習所へ手紙にて木材購入につき問合せる。

六月一九日　金曜　雨後晴

六時半起床、朝食後木工組出かける。小生渋草組の図案の批評及依嘱制作の図案につき相談する。十時ニ十分より正午まで指導所にて木材の水分等につき恩田氏の講義を全員にてきく。昼食後渋草組も出掛ける。
花瓶菓子鉢等をひく。

六月廿日　土曜　晴

六時半起床、ラジオ体操。
小生木工組と共に指導所へ行き、恩田氏に木材購入の為同道して購入すべき木材をきめていただく。
岡本の病気殆んど全快に近し。
十時半就寝。

六月廿一日　日曜　快晴

七時起床、ラジオ体操。
朝食後、日下氏より生徒の渋草の就業状態を見学いたしたきむね電話あり。渋草組及大隅、小生にて出発、日下氏と戸田柳造氏窯を訪問紹介していただく。日下氏よりのお話にて新聞社より江馬修氏等と講習所とに座談会を催したき由なれば江馬修氏より飛騨の歴史をきかせていだく様お願ひする。
渋草組花瓶灰皿等の轆轤。
十時就寝、島村金沢より戻る。

六月廿二日　月曜　晴後雨

六時半起床、ラジオ体操。
木工組出発、十時より木材の水分の含有量等についての講義を恩田氏よりきく。午後より渋草組出掛ける。夜は奈良京都の古美術についての雑談をする。十時就寝。

六月廿三日　火曜　晴後雨

六時半起床、ラジオ体操。
渋草、木工組それぞれ出発。
六月廿日購入の木材の出荷票を中部伐採作業組合高山製材所より受取る。全額百三十円十銭なり。
夕刻吉田氏より明日昼高山へくるといふ電報あり。十時就寝。

六月廿四日　水曜　雨後晴

六時半起床、ラジオ体操。
朝食それぞれ出掛ける。
午後〇時四十八分高山着にて吉田氏来る。藤本、山下、岡本、小生にて出迎へる。一度保寿寺にきたり。

二時頃より、吉田氏と小生とにて指導所へ行き井口所長、恩田氏、代情氏に挨拶をなし、木工組の製品をみて批評をする。山下は本棚・小箱、大隅はシガレットケース、黒瀬は莨入等を製作中なり。
三時半頃より渋草へ行き松山氏に挨拶をする、花瓶皿等の轆轤をひき終へたるもの七八十点あり。
近く陶板の素焼をする予定とのこと。
帰途商工会の前田氏に出合ふ。
夜は図案の批評等をなし十時半就寝。

六月廿五日　木曜　豪雨後小雨

七時起床、豪雨のため午後より出掛ける。木工組は製材所より先日購入の木材を運ぶ。十時半就寝。
以上、内藤四郎記

六月廿六日　金曜　午前雨、午後曇時々晴

再び此の日誌にペンを取る。
降つて晴れ、晴れては降るお天気なるも、東京から来て見ると、こちらはずっと快適なり。梅雨時でも、晴れているときは空気鮮明、城山の森陽に映えるを見れば夢を見るごとし。畠の緑色の葉つぱに一つ一つ指を触れて見る。
案じていた岡本、もう殆ど全快同様になつていたので安心する。一同の元気な笑顔。顔は仕事焼がしていると言ふか、たくましき感じ。
製作状態及び図案を見ると、小生前回滞在の時より一ヶ月半の時日を経ているが、驚くべき進歩を見せて居る。仕事に対する熱情を思ひ心から嬉しくてならない。
日常生活にしても、殆ど我々居らずとも一定の秩序のもとに生徒等は自覚的に行動をしているのに気がつく。大いに喜ぶべきことなり。
十時ニ十分～十二時　木工制作法の聴講
午後　木工組四名
　　渋草組四名
皆午前九時［空欄］分発の汽車で内藤氏御帰京。一同で駅迄御見送りす。
蝉の声、お地蔵さまも寝むそうな午後十時半臥床。

六月廿七日　土曜　曇後晴

午前六時半起床、ラジオ体操。
木工組　四名
渋草組四名
夜山下自製の本棚（組立式）完成したるものを宿舎の室に置き、棚へは本、買求めた古道具、渋草組の作つた灰皿、茶碗、黒瀬の作つた煙草入等置かれ、本棚の上には藤本が松山氏の別荘の窓より描いた油の風景画が置かれ、生徒達のつつましき生活への表現が見られる。一同のたのしそうな顔。小生ここにも一つの美しい表情を見て幸福感を覚えたり。
午後十一時臥床。

六月廿八日　日曜　晴

午前七時起床。

日曜なるも藤本、黒木、渡辺、島村、黒瀬の五人、渋草へ実習。あとの三人は洗濯等した後、図案、写生に過す。
午後十時半臥床。

六月廿九日　月曜　曇

午前七時起床。
渋草組四名、昨日素焼した生徒作品陶板は窯が変つた為十四個の内十個破壊されて出て来た。
木工組四名、大隅君はシガレットケース十個を製作中、岡本君はペーパーナイフを、黒瀬君は煙草セット、山下君は電気スタンド図案を製作中。
十時ニ十分より木工制作法。

六月三〇日　火曜日　晴時々曇

渋草組四名、小さい錦窯に生徒達の手に依つて素焼を試みる。
九時半より午後三時頃までかかる。一同薪割の為手に豆を作つて帰る。
木工組四名。
午後十時半就床。

七月一日　水曜日　午前中快晴なるも午後は大雨も降る雨となる

午前七時起床。
午前中　木工組三名　実習
　　岡本君　図案製作
午後
渋草窯跡見学の予定なりしも雨の為、松山氏を宿舎に迎へて一同図案を批評して戴く。第一回よりはずつと品物になる図案を描く様になつたと褒められしも、商業的立場から見ると未だ未だ駄目だと申して居られた。その後日下部氏がお出になり、一同お茶を飲みながら種々雑談に夕方迄過す。
体力検査の為、島村、山下、岡本、黒木、大隈の五名は午前五時西小学校へ趣く、三十分にして帰宿。

七月二日　木曜日　曇時々小雨

午前六時半起床。
渋草組四名実習。
三十日の素焼は花瓶二個、陶板十個、蓋物ニ十個の内、陶板一個破損したのみにて大成功なり、皆大いに喜ぶ。素焼の自信がついたと鼻を高くして居た。
木工組三名実習。
黒瀬君は額縁、大隅君は本箱の製作に着手す、岡本君は図案制作中。
午後十一時就床。

七月三日　金曜日　曇

午前六時半起床。
午前十時ニ十分より木工制作法聴講
午後　渋草組三名実習
　　木工組二名実習
　　岡本、黒木、山下は図案製作

夜七時過警戒警報発令、一同電燈の下に集まり夫々スケッチ、図案等をする。午後十時半就床。
一日に続いて二日目の体力検査の為、前記五名午前五時出頭。内藤氏より六日来高の通知あり。

七月四日　快晴

七月らしい快晴で、初めて本当の夏が来たと感ずる様な夏の入道雲も見られる日であつた。午前六時半起床。
渋草組　四名実習
木工組　四名実習
午後十時半就床。

七月五日　日曜　快晴

渋草組　五名
藤本君と黒木君大ものの胴張花瓶を競争で作り、二人共成功。乾燥室に並べられた。花瓶、陶板、箱、壺、蓋物、鉢等、百点に近い生徒達の作品を見て見るとよくも此處迄やれる様になつたと仕事の熱心さ上達振りに驚き且つ非常な喜びを禁じ得ず。
七月末までにはより一層の上達に拍車をかけて頑張りを見せるであらう生徒達の健闘は講習所が此處に新しい試み移動教室の成果は予期以上のものを招くであらうと信じて疑はない。今迄のことから考へて高山に於て実習が主になつて図案の方が思つたより進まないことは当然で、是は已むを得ないことであると思ふ。
あまりに多く生徒達に期待を望むよりは、此度の貴重なる経験をよく再検討し、此次からの移動教室には万然の準備（それは単に移動教室のためのものとしてではなく、講習所そのものが建築設備に於いても充実すべき問題と切離して考えることは出来ない）をして望むべきであると思つた。
しかし、今度の高山出張実習の結果が終了後に於いても非常な成績を挙げたにしろ、思はぬ結果を招いたにしろ、単なる喜びや希望に溺れず、失敗に悲しまず、よきにしろ悪るかつたにせよ、現在よりはよき現在を未来を出現するべく、我々は考へ、それを実行に移して行くのでなければならないと反省されるのである。
昨夜、小生、生徒達一同と共に、城山に登り、其所なる茶店のをぢさんにビールを開けて貰ひ、皆大いに呑み、大いに歓談した。星空に満ちて居るのを眺めながら、生徒達の健康を祈り、講習所がよりよく真面目に斯道の研究に自分を没さんとする人達に喜んで研究し、勉学を出来る研究機関、そして発展する様心から祈つた。
就床午後十時。
体力検査三日目、山下、大隅、島村の三名、午前八時公会堂出頭。黒木、岡本は六日。

七月六日　月曜日　晴天

午前七時起床。
午前　木工実習　三名、午後一名
渋草実習　午前無、午後三名
午後〇時五三分の汽車にて内藤氏高山着。小生、黒瀬、岡本のて出迎える。
木工組ラッカーの来たるを大喜び。
夜内藤氏の土産の御菓子で茶話会。今日、今日は非常な蒸暑さを覚ゆ。午後七時、警戒警報解除。

小生此度は全々放任主義を取り、敢へて生徒達の生活には干渉せざるも、生徒達は自覚してよく為すべき所は為し、一回の不平不満を言はず、喜々快々として居つた。然しなお、足らざる所あり。それは已むを得ぬこと。只小生の人格の劣る所より生ずるものにして、是については小生の不徳を謝すのみ。
生徒諸君の健闘を祈つて筆を置く。ようやく慣れ親んだ高山の町もこれで当分お別れと思へば名残り惜しい。特に恩田氏、松山氏、前田氏の如きよき人を知り得て、暫らくお会ひ出来なくなるのは大変残念に思つた。三氏のご健康を祈つて已まない。
吉田丈夫記
午前八時より黒木、岡本、三日目体力検査に出頭。午後一時前日の三名レントゲン写真失敗ノ為再出頭。

七月七日　火曜　快晴

六時半起床。
渋草組四名実習に行く。
九時八分高山発の列車にて吉田氏帰京す。木工組岡本、小生にて見送る。
渡辺陶板、島村花瓶をひく。藤本、黒木灰皿の絵付をする。
木工組山下本立、黒瀬箱、大隅シガレットケース等。
十時臥床。

七月八日　水曜　晴

六時半起床。
岡本、黒木体力検査に行き四時頃帰る。藤本花瓶二■引上ぐ。
菓子の配給券来たり、夜配分す。
十時臥床。

七月九日　木曜　晴

六時半起床。
山下、大隅、島村、体力検査に出頭。他の者はそれぞれ渋草、指導所へ行く。午前十二時高山着にて米納来り指導所を見学。
夜米納の入営祝賀会あり十一時臥床。

七月一〇日　金曜日　晴

六時半起床。
木工組三名にて恩田氏病気の見舞に行き、講義は休みとなり、米納見学の為全員にて渋草に行く。
寄せがき、記念撮影等をして四時八分の汽車にて米納帰省す。
十時臥床。

七月十一日　土曜　晴

六時半起床。
藤本、渡辺、島村、山下、小生にて測候所付近の牧場へ牛を写生に行き、他は渋草、指導所へ行く。
夕刻又島村小生にて三福寺村へ牛を写生に行く。十一時臥床。

七月十二日　日曜　晴

七時起床。
日曜のため渋草組のみ実習へ行く。木工組は植物の写生洗濯等をする。
十時半臥床。

七月十三日　月曜　晴

六時半起床。
簡閲点呼のため渡辺午前九時八分発の汽車にて帰京す。
十時ニ十分より、木材の収縮膨張等について恩田氏の講義をきく。
午後渋草組実習に行く。
十一時臥床。

七月十四日　火曜　晴

六時半起床。
全員渋草及指導所へ実習に行く。小生轆轤を試みる。
午後十時半臥床。

七月十五日　水曜　晴

七時起床。
この日渋草休日のため九時半頃より全員にて松山氏及御子息の御同道をお願ひして陶工加藤源十郎の墓及窯跡を見学に行く。城山の裏手徒歩十五分の畑の中にて破片を少し拾つてくる。午後は又松山氏と共に城山裏手の大降寺にて、源十郎の作品三点程及鋳胴製鍔口（正応年製の銘あり）等を拝見し、帰路日枝神社を参拝。天然記念物の大杉を見て、最後に公会堂にて源十郎の香炉等を見学して帰る。
十時半臥床。

七月十六日　木曜　晴

六時半起床。
全員実習に行く。渋草組は花瓶陶板等十五個程の素焼をする。五時間位にて焼終る。
十時半臥床。

七月十七日　金曜　晴　夕立あり

全員実習に行く。昨日の素焼の窯を開ける為、渋草組は木工の講義を休む。素焼の成績良好なり。
木材の音について恩田氏の講義あり。
十時臥床。

七月十八日　土曜　晴

六時半起床。
全員実習に行く。
十時半臥床。

七月十九日　日曜　晴

七時起床。

この日は日曜なれど渋草組及山下は渋草へ、大隅黒瀬は指導所へ行く。
十一時臥床。
米納の父上より一同にあて令状来る。

七月廿日　月曜　晴

七時起床。
全員指導所へ行き、木材の香り味等につき恩田氏の講義をきく。
午後はそれぞれ実習に行く。
中田氏より廿三日午後高山へ来るといふ電報あり。夜山下旅館にて酒の配給あり。十時半臥床。

七月廿一日　火曜　晴

六時半起床。
全員実習に行く。木工組は新聞入れ、鏡台等を製作中。渋草組は主に染付をする。
十時半臥床。

七月廿二日　水曜　晴

六時半起床。
大隅九時八分高山発の列車にて帰る。
全員実習に行く。午後〇時四十五分高山着の列車にて、中田氏と加納来り。黒瀬、山下、小生にて出迎へる。一度山下旅館にもどり、二時頃より指導所へ行き、井口所長及恩田氏に挨拶をなし、木工の作業を見る。三時頃より渋草へ行き、松山氏及渋草の方々に挨拶となり五時半頃もどる。
十一時臥床。
内藤四郎記

七月二十三日　木曜日　晴暑し

今日より再び日記の筆を取る。
最初に、今度高山に来て二十二日に指導所と渋草に廻って生徒の二月半の精進の成果を見た時の感激から書き初めなければならない。実は前吉田君よりも生徒の仕事に対する熱情はあらゆる不安と完全に一掃し得る程高ぶりなものがあり、安心すべきであるとの事を聞き居たりしが、昨日実際に其の成果を見、心に熱情を感じ、或は生徒の話を聞いて、小生として目頭の熱くなる様な「有難う」と思はず口を出た其の言葉で、若しもここで小生一個の感情を書くことが許されるなれば、重荷の下りたうれしさと云ひ得る心持を味ひ得た事を、なんと書いていいかつたない文句では表現出来ないもどかしさである。
事実それ程よくがんばつて、或は三ヶ月の成果としては無理かとも思はれる所まで手を広げて居る次第。勿論渋草松山氏、指導所の御一同等のなみなみならぬ御好意御指導あつての事なれども、よくもやりつるものかなと云わざるを得ない。生徒自身も「来てよかつた」としみじみと所感をもらし居る事によつても、吾々の積任の一端は為し遂げ得た事を信ずるものである。
之のうれしさを書く事の出来る感激は、小生の一生の中でも今後そうたくさんにある事ではないと思ふ。
朝七時の平湯行のバスにて内藤君出発。

一同朝食をすませて指導所組と渋草組各自の仕事場に急ぐ。小生渋草に同道素焼（生徒作品）の窯つめ火入をなし、三時間程にて火止めをなし、後は生徒ロクロに向ふ。小生二ヵ月半ぶりにて少し試み生徒に教えられて「もつと土ねりをやるべしですなー」等とうれしい冗談も出で、一同六時頃まで仕事をし帰途に付く。
夜校長（来高の事につき昨日速達来る）に返事を、津田、山﨑両先生に通知を出す。

七月二十四日　午前中朝曇午後暑気甚し

十時より木材製作法講義。
午食をすまして渋草に行く。
小生生徒聴講中、津田先生の荷物を駅より取り開き見て、幸に無事。当着に安心す。
商工会前田氏に会ひ先生方来高及講演会の事に付打合せをなす。
大体講演会は一日が高山の方の都合よろしとの事にて、一応先生方の方に其の由を紹介する事にする。
渋草にて先日の素焼を取り出す。幸に好成績に焼上り、ヒズミは一個程なり。火のたき方がよかつたのだと松山氏より御賞めにあづかる。
松山氏と小生色々と腹を割つた話の結果、少し先日の日記に書いた如く、生徒として生き過ぎた所まで仕事をやり過て居る。まだまだ現在なさんとする事の様に思ふが、生徒として製作の熱意がそうさせた事と思ふ故、為すままにして置いたのだが…との事。其れを聞くにつけ、小生、来高最初にてその感じを深くしただけに、今少し途中に松山氏と相談して、あまり自由な制作を生徒自身に考へさせず分に応じた課題の中に生徒の自由を認める方法を取つた方がよかつた事と思ふ。

七月二十五日（土）　晴暑し

朝食後、生徒指導所と渋草の二方に分かれる。黒瀬少し気分がすぐれざる様に見受けらるるため、小生加藤医師に同道す。小生午前中指導所に居り、午後渋草に廻る。
渋草より帰りたるが六時半頃、土曜日なれば一同食後並つて町に出る。

七月二十六日（日）　晴

雨降らんとする如き雲を寝起きに見るも、天気良くなる。
実は生徒水泳したしとの申出ありたれば、高山地方の浅き狭き川では面白くないと思ひ、小生の生家のある萩原町に一同と行く事に決し、今日の日曜一日を仕事を休む事にする。
荻原着。茶がま淵と云ふ深淵、一同の気に入り、中食後より四時頃まで水に入りて楽しむ。島村の傑作の面白き事（向小岸に渡りたるも帰りに泳ぐ自信なく、上流の浅瀬を鮎釣に手を引かれてかち渡りたる）等、一同子供に帰りたる思ひし。
ヒリヒリ痛む皮フを見せ合ひ、荻原発七時十分にて帰高す。
夜は十時頃一同寝に就く。

七月二十七日（月）　晴暑し

午前中は指導所に於て講義、最後の時間にて、終了後恩田技手を囲みて記念撮影をなす。
思へば恩田講師には三か月間実に生徒のために長講を続けられ、生徒をして「講義らしき講義を聞いたと」云ふ。よろこびの言葉を言わしめられたる恩は、個人としても所としても忘るを得ざるものである。
午後渋草組は窯場に、木工組は指導所に行く。午後は小生渋草に行き、帰途洲崎に立ち寄り二十九日の会合の打合せをなす。

校長より二十九日十時十一分着の電報来る。
津田先生に電話す。

七月二十八日　火　晴暑し

朝、津田先生の型を藤本、加納と小生三人して渋草に運ぶ。
今日より最後の仕上げに専念する様昨夜一同に申渡し、以後練習以外のロクロを禁止す。
一同絵付を初め出す。
午後岐阜合同新聞の上島社長と社員一人渋草に来訪。生徒の作品を撮影。なほ三十日、日下部氏宅にて工芸に関する座談会を開催したき申出ありたり。
夕食後、小生前田氏宅に二十九日の事に付、打合せに行けども不在。

七月二十九日　水　晴暑し

午前中、毎日の如く生徒両方に分れて仕事をなす。小生、午前中渋草にて生徒と行動を共にし、〇時五十四分着にて校長、津田、山崎三先生及会計津崎氏の来高を迎へ、中井旅館に案内す。小生は今夕の所として公式の御礼の会について打合せあれば、途中失礼してすぐ帰りで車を用意して渋草に案内す。生徒の作品を三先生に見て頂く。
帰りて会場洲崎樓に行く。
今夕の案内状を出した方々は

市役所側　市長、産業課長（辻の内氏）、北沢、橋本両氏
指導所側　所長、恩田氏、代情氏
業者側　松山吉一氏、吉之助氏、日下部礼一氏、田中松祐斎氏、白川政之助氏
商工会　平田主事、前田光二郎氏
其の他　村医師なり

橋本氏と中村医師は残念ながら欠席の由にて、他は定刻までに御参集を得て、校長の御礼の挨拶に会を初め盛大なり。
三先生を駅に迎へし時津田先生より吉田［丈夫］君召集の報を聞き驚く。津田先生御持参の吉田君の手紙を読み感一入なるものあり。

［七月］三十日　木　晴夜夕立あり

午前中渋草に再び先生方を案内し、正午日下部礼一宅にて御道具を拝見する約束なれば、其の時刻に参上。中食を一同頂き其の他お茶の接待を得て、貴重な蔵品を拝見し、殊に津田先生は古九谷の茶碗及酒入れに対して興一入なるものありたり。一同記念撮影をなす。
校長は二時十分発にて帰京される予定なれば、予定の時間に日下部氏宅を辞す。
夜は七時より岐阜県合同新聞及高山文化連盟共同主催なる工芸座談会日下部氏宅にてあり。生徒も出席しにぎやかなる座談をす。岐阜合同新聞に連載ありたれば、切抜を別に添はす。
［岐阜合同新聞の当該記事の切り抜きが綴じ込まれている］

［七月］三十一日　金　晴

生徒は毎日の如く、各自の仕事場に行き精進す。
今日は午前中指導所に二先生と廻り、恩田講師、其ノ他助手に対して正式に所より御礼を呈す。
中食は田中松祐斎氏、角正に招待したき由なれば、同時刻角正に行く。御馳走になり後、二先生と渋草に行き、市其の他より依頼せられたる色紙其の他の［空欄］を終り、夕刻生

徒主催になる謝恩会に出席のため洲崎に行く。松山兄弟、日下部礼一氏、恩田技手及前田光二郎氏の御出席を得て、水入らづに盛会なりき。

八月一日　土　晴

市商工会主催にて工芸講演会保寿寺に於て開催さる。

小生　　「工芸に於ける日本的なるものに就いて」
山崎先生　「現在工芸界の当面せる諸事情及其れに対する見通し或は心構えに就て」
津田先生　「大局より心と物の両面より工芸を論じ地方工芸の覚セイと示唆を与へられ」

十二時近く閉会、多数聴講あり。主催者側よりも近来になき有益なる講演会ないしとのよろこびの言葉を得て、角正にて商工会よりの接待を受け、二時十分の上り準急にて両先生津崎氏御帰京。生徒一同と共に駅に送る。
大体これにて一応出張教室を打ち切りたる理なれ共も、渋草窯つめが十日頃の予定にて生徒の仕事もいまだ残り居れば、藤本、黒木、島村、岡本、山下の五名及小生は終りまで居残る事となる。
明日より予定を立て順序立て、絵付をなす事及木工山下は曲木及挽物の実習をなす事に申合せて、一同張り切る。
黒瀬は家庭の都合にて明二日帰省する事とす。

大体七月中の出張予定が右の如く延長を必要とする事にあり。
今後は予定を立てて、本窯が十五日前後なればそれまでに一切を完了する様にする。
以下、毎日の日記は略する事にする。
［工芸講演会に関する新聞記事が貼付されている］

八月十一日

藤本体力検定のため帰京す。
窯入れの予定が十五日より延びるらしく、松山氏の方も現在大馬力をかけ制作中なり。

八月十五日

窯入れが今月末になる様に松山氏の話がありたる故、生徒一同とも相談の結果一応帰省する事に決し、上絵付けは図案によつて小生が完成する様に一同に図案を細かく描かせて置く。
十時の汽車にて一同帰る。
前日山下に臨時召集令状来る。帰省の予定を立てて居た所とてあわてて予定変更の必要もなけれ共、本人としては来るべきものが来た思ひにて身のしまる思ひのありたる事なるべし。

八月二十二日

藤本来高。

八月二十八日

本窯焼上り、ほとんど全部窯運よく完全なり。

八月二十九日

藤本と二人して上絵付に取りかかる。

九月四日

生徒在高中の製作品を信用組合二階に於て開催す。
多数来観好評なり。
［作品展に関する新聞記事が貼付されている］

九月六日

一切の後始末をなし藤本と二人帰京す。

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター年報
令和5年度（2023）
編集・発行　東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター
発行日　2025年3月31日

GACMA：GEIDAI Archives Center of Modern Art
110-8714　東京都台東区上野公園12-8
https://gacma.geidai.ac.jp/